
The “I,” the “We,” and the “When” : A Meta-Analysis of Motivational Primacy in Self-Definition

Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 83, No3, 574-591.

Rep. 脇本竜太郎¹

1. 本論文の理論的背景

◆本論文のアプローチする問題

- ・自己概念（の側面²間）には動機的な階層性が存在するのか？
- ・自己概念のどの側面も同等の動機的安全性(equal motivational potential)を持つのか？
- ・どの自己概念の側面が動機的な観点から最も優位なのか？

◆上記の問題に対する 3 つの立場

➤個人的自己(individual-self)が動機的な観点から最も優位であるという立場(以下個人的自己説)

*個人的自己：内集団他成員と自己の違いを示すような特性(身長の高さ，知能の高さ等)で構成された自己の側面

【支持する知見】

- ・個人的自己は自然選択の単位である(Sedikides & Skowronski, 1997 等³)
→個人を防衛しようという動機が強いほど，個体は生き残るはず
- ・個人的自己の核となる特性は，状況を通じて非常に安定している(Sedikides, 1995 等).
また，比較的短い時間間隔でも(Pelham & Wachsmuth, 1995 等)，さらには一生を通じてでも安定している(Caspi & Roberts, 2001 等)
- ・自己概念の変化は緩慢かつ予測可能な，秩序だったものである(Deutsch, Ruble, Brooks-Gunn, Flemming, & Stangor, 1988)
- ・個人的自己が安定的なのは，個人的自己に対する脅威情報に対しては激しく防衛が行われ(Sedikides & Strube, 1997 等)，また自己確証的な情報を選択的に追求・同化するためである(Dunning, 1999)

➤集団的自己(collective-self)が動機的な観点から最も優位であるとする立場(以下集団的自己説)

*集団的自己：内集団他成員と共有された特性(ex 国籍，肌の色等)で構成された自己の側面。内化された成員性。

【支持する知見】

- ・個人同様，集団レベルでも自然選択(環境により良く適応した集団が生き残る)が起こり，

¹ 東京大学教育学研究科修士課程；E-mail:wavern@p.u-tokyo.ac.jp

² 本レジュメでは文脈上，self-definition に「自己概念の側面」という訳をあてます。自己定義という表記を用いる場合は，その側面が自己概念の中心として活性化している(作働自己)，ということの意味します。

³ 同じトピックに引用文献が複数あるときは，最も出版年の新しいもののみを掲載しています。

集団の利益を維持するような特性をもった個人は集団の生き残りに寄与し、結果として自己が生き残る可能性を高める(Wilson & Sober, 1994).

- また、集団は生存に寄与するもの(資源, 情報, 捕食者からの防衛)を個人に提供するため、集団生活能力の高いものはそのような資源をよりよく手に入れ、生存可能性が高まる
- **Optimal Distinctiveness Theory(Brewer & Roccas, 2001)**: 集団適応の際、集団的自己は同化(集団に溶け込む)と異化(自己としての独自性を保つ)という2つの要求を同時に満たす最もよい自己定義である。

➤個人的自己と集団的自己のどちらが優勢かは、状況や文脈によって決定される立場(以下文脈説)

【支持する知見】

- **Markus** らの一連の研究(Markus & Wurf, 1987 など): 自己概念は慢性的・急性的にアクセス可能な特性の集合(要は長期記憶のネットワークのようなもの)であり、行動はそのとき自己定義に使われている特定の特性によって制御される。
- 自己カテゴリ化理論(Self-categorization theory; Turner, Oaks, Haslam, & McGarty, 1994): 自己概念は社会的文脈によって定義される流動的なもの(Markus らのような安定した特性のネットワークの存在を仮定しない)

◆上記に示す通り、各立場はそれぞれ支持する知見が蓄積されている。しかし、単一の仮説を検証する場合は確証バイアスがどうしてもつきまとうものである。

→どの仮説が尤もらしいのかを検討するより良い方法は、それぞれを直接比較すること。

→しかし、自己概念の問題は社会科学の重要な問題で有るにもかかわらず、それぞれの仮説を直接比較したのは Gaertner, Sedikides, & Graetz(1999)のみ。

↓

そこで、メタ分析を行い、現在までの研究を統合することでこの問題に対する解決策を提示する

2.研究の検索

◆文献の検索

➤PsycINFO

- 1970年1月から2000年4月までの研究を、以下の単語で検索

個人的自己: individual self, individual identity, personal identity

集団的自己: collective self, collective identity, personal identity

- また、研究の検索もれを防ぐため、さらに individual, group というより抽象的な単語を用いて検索を行った

➤SSCI(Social Sciences Citation Index)

- PsycINFO で選ばれた研究を引用している研究を検索。

➤Graetz(1992)から、関連する未発表研究

⇒これらの結果、18の実験と37の効果量が抽出された。

◆自己の側面間の動機的な優位性の差異は現象的にはどう捉えられるのか?

→筆者らの主張:脅威情報もしくは高揚情報が与えられた時の反応の差異として捉えられる。

i.e.人は、動機的に優位な側面に脅威情報が与えられると、そうでない側面の場合よりもその情報を強く否定・拒否しようとし、逆に高揚情報が与えられると、よりその情報を肯定、受容しようとする(Sedikides & Gaertner, 2001).

…メタ分析の対象となる研究は

- a) 個人的自己もしくは集团的自己に好ましい／好ましくない情報をフィードバックし、その反応の差異を検討した研究
- b) 個人が好ましい／好ましくない情報を個人的自己および集团的自己と連合／隔離する程度を検討した研究

◆Inclusion Criteria

➤独立変数に関して

- ・ 個人的自己と集团的自己が独立に評定されている、もしくは別個にフィードバックが返されている→区別がなされていないと当然効果量が産出できない
- ・ 個人的自己と集团的自己が比較される領域・次元が同じ(同じ形容詞リストを使用している等)、若しくは同じ領域にフィードバックが返されている→次元の違いが交絡するのを防ぐため

➤従属変数に関して

- ・ それぞれの自己に対する同じ反応(両方で感情状態を測定している等)の測度が用いられていること

3.調節変数

◆調節変数のコーディング(Table1 に各研究のコーディング結果、効果量、条件付分散を掲載)

➤情報の種類 (脅威 vs.高揚)

- ・ 是非検討したい変数ではあるが、殆どの研究が脅威・高揚を被験者内要因として扱っている
→統計的独立性の問題を考慮し、本分析では脅威と高揚に関して別個に検討を行う。

➤グループへの同一化の程度 (高 vs.低)

- ・ 文脈説を検討するために導入.
- ・ 集団間比較の文脈では集団への同一化が強まる. 集団内比較の文脈では集団への同一化は弱まると考えられる.
- ・ 同一化の程度がもともとの実験のデザインによって示されているものはそのままコーディングを、示されていないものにかんしては自己カテゴリ化理論のメタ対比の原理を用い、本論分の著者らが分類しコーディングした. このコーディングの手続きの差異も調節変数として導入した.

➤同一化の程度のコーディング(オリジナルの研究 vs.著者らによる): 上記の通り.

➤集团的自己の依拠する集団の種類 (実際の社会的集団 vs.実験内だけの最小条件集団)

- ・ 一部の実験では最小条件集団パラダイムに基づく一時的な集団(最小条件集団)を、他方は政治集団等もともと存在する社会的集団を用いている. これらの集団間には、実際の社会的集団のほうがコミットメントが強いなどの差異が存在し、調節効果が予想される.

➤フィードバックの対象の曖昧さ(曖昧 vs 明確)

- ・ 一部の実験では、明確に集団的自己のみにフィードバックを行っているが、一部では、期せずして集団的自己へのフィードバックが個人的自己にも向いてしまっている(両方に向いていると解釈される)可能性が考えられる。・・・結果に影響する可能性
- ・ ただし、明らかに集団的・個人的両自己にフィードバックを向けている研究は分析から除外した。

4.予測

◆各説から導かれる予測

- ・ 個人的自己説：集団的自己よりも個人的自己のほうが、より強く防衛・高揚される。
- ・ 集合的自己説：個人的自己よりも集団的自己のほうが、より強く防衛・高揚される
- ・ 文脈説：どちらかが強く防衛・高揚されるかは集団への同一化の程度や集団の種類といった文脈的変数によって決まる。

◆情報の性質から導かれる予測

➤Positive Negative Asymmetry に関する知見

- ・ **Tversky & Kahneman(1986)**：損失の可能性に対する反応は、獲得の可能性に対する反応よりも強い。
- ・ **Sedikides & Green(2000)**：原因帰属や情報処理は、高揚場面よりも脅威場面でよりバイアスがかかる
- ・ **Rozin & Roysman(2001)**：ネガティブな情報は、ポジティブな情報よりも評価に強い影響を及ぼす
- ・ **Ito, Larsen, Smith, & Cacioppo(1998)**：脳では、ネガティブ情報は中性的な情報やポジティブな情報よりも重み付けされている

⇒これらの知見を踏まえると、高揚よりも防衛の際に動機的優位性の差異がよりはっきりと顕れるであろう。

5.効果量の産出・研究の統合

◆効果量の産出

➤ここでの効果量の定義：

個人的自己への刺激(高揚/脅威)に対する反応と集団的自己への刺激に対する反応の強さの標準化された平均値差

正の値が個人的自己への刺激に対する反応がより強いことを示し、負の値が集団的自己への刺激に対する反応がより強いことを示す。

➤効果量の計算に関して：

自己の種類は被験者内要因だが、被験者間要因とみなしてプールされた標本標準偏差を用い、**Hedges** の ***g***(**Hedges & Olkin, 1985**)を産出している。

→反復測定デザインの分散分析の際には誤差の平均平方を用いるのが適している。しかし、反復測定デザインでは大抵誤差が小さくなるため、効果量が系統的にインフレを起こしてしまう。よって、インフレを防ぐためにここでは **Hedges** の ***g***を用いている(!?)。

◆今回の分析のモデル：混合効果線形モデル

➤今回の分析の目的

- ・ 自己概念の動機的優位性の問題に関する研究の母集団に対する推論，つまり一般化可能な回答を得ること
- ・ また，調節効果の部分で述べたとおり，関連する要因の効果も同時に検討すること
→このような目的から，研究結果の一般化が可能であり，また同時に研究間の分散を説明する要因を検討できる混合効果線形モデルが適当だと思われる。
- ・ 変量効果モデルの適用には母集団に正規分布が仮定できる必要・・・効果量と残差の分布を図示して視覚的に検討した結果，正規分布が仮定できると判断された。

◆しかし，得られる結果がモデルによって異なるという可能性を排除するため，同時に固定効果モデルによる分析を行い，比較を行う。

6.結果

6-1. 脅威次元での結果(Table3, 4)

◆混合効果モデルでは，調節変数で説明できない有意な変動(超過変動)が示されている(つまり均質性が保たれていない)。

→超過変動をモデルに含めない固定効果モデルでは，標準誤差が過小評価され，第1種の誤りが生じやすくなる。

Field(2001)：均質性が担保されない時，固定効果モデルは **31%**から **72%**の割合で第1種の誤りに陥る

◆調節変数の効果

➤フィードバック対象の曖昧さ(**Confound-free procedure**)

- ・ Q 統計量は有意→固定効果モデルは第1種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 固定効果モデルでは有意な傾向の効果，混合効果モデルでは有意な効果なし

➤グループへの同一化の程度 (**Identification**) および同一化の程度のコーディング (**Determinant**)

- ・ Q 統計量は有意→固定効果モデルは第1種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 固定効果モデルでは同一化の程度の主効果と，一時の交互作用が見られたが，混合効果モデルでは両変数の主効果，交互作用とも見られず。
- ・ 固定効果モデルでは調節変数の効果が見られたが，各セルの効果量の平均値を見ると全て符号がプラス→文脈節を支持するわけではない。

➤集団の種類(**Group type**)

- ・ Q 統計量は有意→固定効果モデルは第1種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 固定効果モデルでは有意な効果，しかし混合効果モデルでは有意ではない。
- ・ 同一化の場合と同じく，全てのセルの効果量の平均は正の値をとっている。→文脈説とは矛盾

◆調節変数等を全て覗いた，研究結果を単純に統合しただけのモデルの分析

- ・ ここでも Q 統計量は有意→固定効果モデルは第 1 種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 平均した母集団効果量は正の値・・・脅威次元における個人的自己説を支持

6-2.高揚次元での結果(Table5, 6)

◆脅威次元の場合と同様，混合効果モデルでは超過変動が示されている

→固定効果モデルによる分析は第 1 種の誤りを犯している危険性が高い

◆調節変数の効果

➢フィードバックの曖昧さ(**confound-free procedure**)

- ・ Q 統計量は有意→固定効果モデルは第 1 種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 両モデルで効果なし

➢グループへの同一化の程度 (**Identification**) および同一化の程度のコーディング (**Determinant**)

- ・ Q 統計量は有意→固定効果モデルは第 1 種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 混合効果モデルは全ての主効果と交互作用が有意にならなかった.
- ・ 固定効果モデルでは同一化の程度が有意，程度のコーディングと一次の交互作用が有意
→しかし，全てのセルの推定周辺平均は製の値・・・文脈説とは矛盾

➢集団の種類(**Group type**)

- ・ Q 統計量は有意→固定効果モデルは第 1 種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 両モデルで効果なし

◆調節変数等を全て覗いた，研究結果を単純に統合しただけのモデルの分析

- ・ Q 統計量は有意→固定効果モデルは第 1 種の誤りを犯している可能性高い
- ・ 両モデルで推定平均は正の値→高揚次元においても個人説が支持される

7.議論

7-1. 分析結果のまとめ

◆分析の結果...

- ・ どの調節変数も，混合効果モデルに基づく分析では有意な効果を持たなかった.
- ・ 固定効果モデルに基づく分析では調節変数の効果が有意になることもあったが，Q 統計量が有意になっているため分析結果の信憑性は低い.
- ・ 調節変数の水準ごとに効果量の推定周辺平均を産出しても，値は全て正
- ・ 調節変数を全て覗き，単純に自己の種類間の効果量を統合したところ，値は正
- ・ 脅威，高揚両次元でほぼ同様の結果のパターン

⇒個人的自己説からの予測のみを支持している.

また，

- ・ 脅威，高揚で効果量に大きな差はない

⇒高揚次元よりも脅威次元で動機的優位性の差異がより明確に顕れるという仮説を不支持.

7-2.本分析の限界と注意点

◆効果量の偏り

- ・ **Table 4, 6** から明らかなように，セル間で効果量の数のばらつきが大きい

→セル平均産出自体には問題ないが、結果の一般化には慎重になる必要

←しかし、効果量の数が多いのはむしろ個人説と反対の結果が予測されるセル(同一化の程度高や自然集団のセル)であり、それでも個人説を支持する結果が出ているという点には注目すべき。

◆代替解釈の可能性

➤集団的自己は個人的自己よりも再構成しやすく、また脱同一化(**disidentification**)も容易なのではないか？

- ・ 集団的自己が再構成可能なものかは研究結果が一貫しない(**Jackson, Sullivan, Harnish, & Hodge, 1996**). むしろ、個人的自己に関しては再構成が可能であることが明確に示されている(**Tesser, 2000** 等)
- ・ 脱同一化に関しても、個人的自己が脅威にさらされた時に生じる対処法略(**Mussweiler, Gabriel, & Bodenhausen, 2000**)とされ、また集団に対する同一化も個人的自己が脅威にさらされた時に起こる(**Cialdini, Borden, Throne, Walker, Freeman, & Sloan, 1976**)とされており、集団的自己のほうが脱同一化が起こり易いとする理由はない。
- ・ また、この批判はフィードバックを行った研究には適用可能であるが、特性形容詞で各自己を評定させた研究に対する説明を行うことができない。

⇒総じて、この代替解釈の妥当性は高くないと考えられる。

➤集団的自己は個人的自己よりも複雑なのではないか？

Linville(1982): 社会的および非社会的対象は、それが認知的に複雑に表象されていればいるほど、あまり極端に評価されない。

- ・ しかし、最近の **Linville** らの研究(**Linville, Fisher, & Yoon, 1996** 等): 表象の認知的複雑さの一部は対象との親近性によって規定
→人間にとって一番親近性が高いのは自己(**Prentice, 1990**)
- ・ 自己について描写する記述課題で、人は集団的側面よりも個人的側面を多く挙げる。また、その傾向はその個人の生まれ育った文化の種類(**Trafimow, Triandis, & Goto, 1991**), 文化的自己観(**Gaertner et al., 1999**), 自己の顕現性の操作(**Ybarra & Trafimow, 1998**)によらない。→むしろ個人的自己がより複雑に表象されていることを示唆
- ・ また、研究で用いられている従属変数は評価だけではなく、感情等の反応も用いられている・・・**Linville(1982)**の主張が全般的に適用できるわけでもない

⇒以上より、この批判の妥当性は高くないと考えられる。

◆個人的自己を調節する変数

- ・ 本研究では、個人的自己を調節する変数、つまり「自己への同一化の程度」を検討していない
→自尊心や自己概念の明瞭さ、ナルシスト傾向、自我の柔軟さ、パーソナリティの頑健さ等はそのような変数として検討することができるであろう。

◆状況要因に関するさらなる検討の必要性

- ・ ある極端な状況では集団的自己が個人的自己よりも有意になる可能性は未だ残されている(**ex.戦時下, オリンピック時など**).

⇒今回の分析の結果は「殆どの状況で、自己概念において個人的自己が動機的に有意」

7-3. 他の研究との整合性

➤今回のメタ分析の結果は、他の分野の個人的自己の優位性を示す結果と整合。

記憶(Klein, 2001), コントロール理論(Carver & Scheier), セルフスキーマ(Green & Sedikides, 2001), 印象形成(Otten & Wentura, 2001), 自己決定理論(Deci & Ryan, 2000)

7-4. 本分析からの示唆:

個人的自己と集団的自己の関係について

- ◆人は社会的動物：自己は他者とのかかわりの中で形成され、社会集団と相互作用を持ちながら生きる・・・社会集団は実際欠くべからざるもの
 - これと個人的自己説を併せて考えると、社会集団は、個人のニーズに応える防衛メカニズムとして捉えることができるのでは？
 - Hogg & Mullin(1999)：社会集団は情報と意味を構成員に与え、不確実性を低減する
 - Mussweiler et al.(2000)：個人的自己へ脅威が与えられると、個人は集団的自己の側面を活性化し、その脅威を緩衝する
 - Foster & Mateson(1999)：内集団への差別が個人的自己への脅威と知覚されるとき、より集団的行動が起き易くなる

- ◆個人的自己よりも集団への貢献を重視する行動も見られるが、それは集団的自己が個人的自己に恩恵をもたらす限りにおいてのことと解釈できる。
 - Zwerdling(1996)：パレスチナのカルト集団における自爆テロは、天国での潤沢な見返りの期待の下、行われる
 - Gaertner & Insko(2000)：人が集団に対して多くの金銭を配分するのは、自己の利得が内集団のほかの成員によって影響を受ける時のみ

個人的自己の優位性は汎文化的か？

- ◆Heine, Lehman, Markus & Kitayama(1999)等に見られる自己の文化的構成説
 - 自己は文化と相互構成関係にあり、個人主義的な文化では個人主義的自己が、集団主義的な文化では集団主義的自己が育まれる
 - Heine & Lehman(1995)：日本には自己高揚という動機のレパートリーは存在しないとすれば、文化によって個人的自己が優位とは限らないのでは(結局文脈説が正しいのでは)？

- ◆しかし、集団主義的な文化でも、個人的自己の優位性をうかがわせるような知見が報告されている
 - アジア圏の被験者でも、潜在的指標では自己高揚的反応を示す(Kitayama & Karasawa, 1997 等)
 - 相互依存的自己観(関係志向的な自己観)を持つ者でも、Implicit Association Test⁴では個人的自己を高揚する(Farnham, Greenwald, & Banaji, 1999)
 - Kurman(2001)：相互依存的自己観のものは、対人的な特性に関しては自己高揚する

⁴ 潜在的な態度を測定する方法。詳しくは Greenwald & Banaji(1998, Journal of Personality and Social Psychology)を参照のこと

- **Diener, Diener , & Diener(1995)** : 収入さ, 人権侵害の程度, 文化の複雑さの盈虚を覗いても, 個人主義的な文化ほど個人の主観的 **well-being** も高い($r=.77$)
 - **Ybarra & Trafimow(1998)**等 : 集団主義的な人の中にも個人的自己は見られる.
- ⇒これらの知見を併せると, むしろ文脈に依存しているのは集団的自己のほうであり, 個人的自己は汎文化的だと思われる.